

## まとめ

本調査は主に、スポーツ指導の場における暴力とセクシュアル・ハラスメントについて、双方の当事者である指導者と競技者（本文では調査用紙に基づき「選手」とした）を対象にこれらの行為に対する評価、受容（競技者のみ）、経験を明らかにし、その実態をより複層的に解明することをめざした。

調査は、各都道府県体育協会登録指導者（全レベルを含む）と、主に国体レベルの競技者を対象とした。暴力に関しては、指導者が競技者に対して行う「暴力を含む反倫理的行為」12項目について、指導者および競技者に対し、それらの行為への評価、受容（選手のみ）、経験をたずねた。セクシュアル・ハラスメントに関しては主に、男性指導者が女性競技者に対して行う16項目の「セクシュアル・ハラスメントになりうる行為」について、「暴力」の場合と同様に指導者および競技者双方に対し、それらの行為への評価、受容（選手のみ）、経験をたずねた。設問項目のひとつは、最近新聞報道などで報じられる男性選手へのセクシュアル・ハラスメント的行為を設定した。主な設問項目を男性指導者から女性競技者への行為に限定したのは、それが日本における最も可視的なセクシュアル・ハラスメント事例を代表するものであるという理由であり、そのほかの諸関係におけるセクシュアル・ハラスメント事例を軽視するものではないことを再度確認しておきたい。

また調査の過程で、現在の日本のスポーツ組織における倫理問題に対する取り組み状況を明確にする必要性を感じ、(財)日本体育協会加盟団体に対する調査をあわせておこなった。その結果は第2章に別途まとめたのでご参照いただきたいが、倫理規定の策定や倫理問題防止のための組織的な取り組みはおおむね低調である様子が見えかけた。しかし一方では、現実にはそうした倫理問題が生じたときにはスポーツ統括組織は否応なくその対応を迫られる現状にあり、対策が急がれるのも事実である。

本調査からは、指導に直接たずさわる指導者やスポーツの主体である競技者の、暴力やセクシュアル・ハラスメントに関連する認識や経験や意見が、怒りやとまどいととも浮き上がった。ここでは、「暴力」「セクシュアル・ハラスメント」それぞれに、指導者（全レベルを含む）と競技者（主に国体レベル）の認識や経験を分析した結果、および分析対象を全国レベル以上に絞って指導者と競技者を比較した結果、自由記述欄の分析、インタビューの報告から総合的に、本調査結果の概要をまとめたい。

### ＜暴力を含む反倫理的行為に関する指導者の評価と経験＞：全レベル

指導者の全体的な傾向としては、設定した12項目について、おおむね不適切とする評価であったが、「罰としてのトレーニング」「罰としての正座」に対してはそれぞれ10%程度の指導者が適切と考えており、これらの行為に対する肯定度が高かった。評価と経験を比較すると、適切と評価する人を上回って、実際にそうした行為を経験している指導者が多いという傾向が、すべての項目において見られた。12項目を5つの領域に分類して見ると、＜水を飲ませない＞という非科学的行為に関しては、不適切という評価と経験が最も一致しており、この点についてのスポーツ科学の認識はほぼ指導現場で共有されているものと思われる。しかし、それ以外の＜指導者への奉仕：「身の回りの世話」「マッ

サージ」>、<「身体的暴力：「平手でたたく」「拳で殴る」「足で蹴る」「モノでたたく」「ボールなどを投げつける」>、<罰としてのトレーニング・正座>、<精神的暴力：「人格を否定する発言」「存在を無視する」>については、6～25%程度行われていることがわかった。

性別で比較すると、これらの行為の評価に関しては差異がなかったが、経験に関してはすべての項目において女性よりも男性指導者の方が多く経験しており、7項目（平手・足・モノ・ボール・罰トレ・罰正座・人格否定）で有意差が認められた。

年齢層別で比較すると、評価、経験ともに有意差があり、経験については比較的若い層の指導者に、反倫理的行為経験が多く見られた。

指導レベル別の比較では、評価についての差異は見られないが、経験については有意差があり、総じて国際レベルの指導者に、これらの行為経験が多い傾向が見られた。

以上のことから、総じて男性指導者、比較的若い年代の指導者、国際レベルの指導者に、反倫理的行為経験が多い傾向が見られた。

#### <暴力を含む反倫理的行為に関する競技者の評価と受容と経験>：主に国体レベル

全体的な傾向として、全項目において、適切だと評価するよりも多くの競技者が、これらの反倫理的行為を受容する傾向が見られた。また、受容と経験の比較では、「マッサージ」と「罰としての正座」を除く全項目において、受け入れられると考えるよりも多くの競技者が、これらの行為を経験していることがわかった。全項目について、その経験率は20%～50%程度を示した。

<身体的暴力>の経験について見ると、多い順に、「モノでたたく」、「平手でたたく」、「足で蹴る」、「ボールなどを投げつける」、「拳で殴る」と経験しており、全レベルを含む指導者の経験とほぼ連動していることがわかる。

性別で比較すると、評価、受容、経験ともに有意差が見られた。評価と受容は連動しており、傾向として、「マッサージ」や「身の回りの世話」などの<指導者への奉仕>は女性競技者に肯定的回答が多く、「平手でたたく」「足で蹴る」「拳で殴る」などの<身体的暴力>では男性競技者に肯定的回答が多かった。経験における男女差の傾向は少し異なり、<指導者への奉仕>はやはり女性の経験率の方が高いが有意差は見られず、有意差の見られた5項目（平手、拳、足、罰正座、水を飲ませない）では、いずれも男性競技者の経験が多かった。また有意差は認められないものの、「モノでたたく」「ボールなどを投げつける」は、女性の方が男性よりやや多く経験している傾向があった。このように<身体的暴力>に関してはモノを介在した暴力的行為を女性も実際に受けていることがわかるが、少なくとも競技者側の認識レベルにおいて、男性については<身体的暴力>との親和性が、女性については<指導者への奉仕>との親和性がみられたのが特徴的である。

#### <暴力を含む反倫理的行為に関する指導者と競技者の比較>全国レベル以上

総じて、評価と経験ともに、指導者よりも競技者の方に肯定的な回答が多かった。経験の数値を単純比較することはできないが、指導者、競技者とも、適切だと思う人よりも多くの人が実際にこれら

の行為を経験しており、その差異は競技者の方が大きい。評価の比較においては有意差が認められ、「水を飲ませない」「人格を否定する」「存在を無視する」以外の9項目で、競技者の方が指導者よりもこれらの反倫理的行為を許容していることがわかった。しかし同時に、評価において有意差の見られなかったこの3項目については、適切と評価する人に比べて実際に経験している人が多いのが印象的で、これらの反倫理的行為が指導現場からなくなっていないことがわかる。

競技者の認識の甘さが、これらの反倫理的行為を蔓延させると考えることも可能だが、逆に、それ（肯定的評価）を上回る実際の経験の多さが、競技者たちの評価を鈍化させているという可能性も否定できない。分析対象が全国レベル以上の競技者であることを考えるとむしろ、ドロップアウトできない状況の中でこうした行為を経験し、受容せざるを得ず、そうした経過が彼ら／彼女らの評価を形成していくという連鎖についても、慎重に検討するべきであろう。

### <スポーツ指導における暴力>自由記述から

自由記述からは、このような指導者や競技者の、暴力的行為に関する具体的経験や考えをすくいとることができた。見聞を含めた経験の典型的なものは、「手」や「竹刀」、「棒」などで「顔」や「頭」、「おしり」、「太もも」などをたたき、そして「足」を蹴る、といった行為であり、「モノ」や「椅子」を床に投げつけるという行為も報告された。また、「帰れ」、「来るな」、「へたくそ」「だからお前はレギュラーになれない」というような、競技者を貶めるような暴言も報告されており、数値データの具体的な裏づけとなるような事実が浮かび上がった。

暴力に関する記述にみられた特徴のひとつは、このような暴力的行為が練習場や試合会場において公然とおこなわれていることであり、これは、スポーツ指導においては暴力的行為が許されるという共識が関係者（指導者、競技者のみならず保護者なども含む）に共有されていることを示している。ふたつめの特徴は、暴力的行為を受けた経験のある人が、指導者も競技者も、その経験を「暴力」とは思わず「指導」としてとらえ、さまざまな意義づけをしながら肯定的に受け入れている点である。

このような暴言も含めた暴力的行為に対する考え方の傾向としては、セクシュアル・ハラスメント（後述）と異なり、肯定的意見と否定的意見が拮抗していることである。肯定的意見は、いわばふたつのダブルスタンダードから成り立っていると考えられる。ひとつは、その行為を暴力とみなすか否かという点における二重基準であり、一般的には「暴力」と解される行為が、愛情や信頼関係、指導者の経験の高さがあれば、「しつけ」や「指導」に換言されることになる。ふたつめは、こうした行為が必要か必要でないかという点における二重基準であり、ハイレベルで勝利をめざすなら暴力を伴う指導は「仕方がない、許される、ごく自然な、必要」な行為として肯定され、そうでない志向のスポーツでは「必要ない」ということになる。

これら二つのダブルスタンダードの双方が受け入れられるとき、スポーツにおける暴力的行為はあらゆる指導場面で容認されていくことになり、そうした価値観が支配的な指導の場では、疑問を感じる関係者がいても反論しにくく、沈黙を守るか競技の世界からドロップアウトせざるを得なくなる。結果的にスポーツ界のなかでこうした行為は淘汰されることなく、それを肯定する指導者や競技者、

あるいは保護者によって再生産され続けることになってしまうのだ。

暴力的行為を否定する意見のなかに、その理由について明確に記述されたものは少なかったが、指導者としての力量のなさが暴力に頼った指導として現れるという指摘や、日本の指導者制度が内包する問題点を指摘する意見もあった。つまり、多くの指導者が経済的な報酬のない状況で私生活を省みず多くのエネルギーをスポーツ指導に注いでいるという現状が、指導者と競技者の距離を近づけすぎ、こうした倫理問題の一因となっているのではないかという指摘である。こうした指摘からは、より効果的なコーチング方法の構築の必要性や、日本のスポーツ界がもつ社会的な制度を変えていく必要性が感じられた。

### <セクシュアル・ハラスメントになりうる行為に関する指導者の評価と経験>全レベル

セクシュアル・ハラスメントになりうる行為に関しては、設問を主に男性指導者から女性競技者への行為に設定したので、指導者に関しては主に男性に焦点化してまとめる。

男性指導者で肯定的評価が高かった上位3項目は、「月経について聞く」「マッサージでさわる」「挨拶でさわる」であり、指導者全体の評価／経験傾向、および男性指導者自身の経験傾向と一致していた。指導上の必要性がその理由として考えられる。「恋愛関係」については10%程度の男性指導者が適切と評価していた。経験の特徴としては、上記の上位3項目のほかに「容姿に関する発言」や「お酌」などの指導に関連しない行為が10%程度あがっている。なお、男性指導者と女性指導者の比較では、評価に有意差はなかったが、男性の行為経験と、女性の見聞経験では、全項目について女性の見聞経験が上回った。

男性指導者の評価と経験の比較においては、総じて適切とする評価と比べてその行為をおこなっている指導者が多いことがわかる。特に「容姿に関する発言」、「ひわいな発言」、「じろじろ見る」、「挨拶でさわる」、「二人きりの食事」にその割合が比較的高い。「挨拶」以外は指導に関連する行為とはいえず、いわゆるセクシュアル・ハラスメントに該当する行為といえよう。

年齢別に男性指導者の経験を比較すると、「月経について聞く」「一人だけ呼び出す」「マッサージでさわる」の3項目で有意差が認められ、後者2項目では20歳代の経験率が最も高かった。

指導レベル別に男性指導者の経験を比較すると、年齢別比較と同じ3項目において有意差がみられ、3項目とも国際レベルの指導者の経験率が最も高かった。女性指導者の指導レベル別見聞経験を見ると、上記3項目を含む7項目において有意差が見られ、その全項目で「国際レベル」の指導者の見聞経験が高かった。国際レベルの女性指導者が見聞した事例の男性指導者が必ずしも国際レベルであるとはいえないが、ハイレベルの指導者ゆえに彼女らの指導頻度は非常に高く、また自分と同等レベルの指導現場の現状をいちばんよく知っていると考えられる。「容姿」「食事」「お酌」「性的関係」のうち、「容姿」と「お酌」は上記3項目とともに、国際レベルの男性指導者が最も高い経験率を示したことからも、これらの行為は、国際レベルの指導現場で比較のおこなわれる傾向があると考えられる。

以上より、総じて男性指導者は適切と評価する以上に多くの人が、セクシュアル・ハラスメントになりうる行為をおこなっている現状がうかがえた。「月経」「呼び出し」「マッサージ」についてはとも

に、年齢層と指導レベルによる経験率の差異が認められ、傾向としては 20 歳代の若い指導者と国際レベルの指導者がこれらの行為を多く経験していることがわかった。これらの 3 項目については、指導に関連した行為でもあり、必ずしもそれ自体がセクシュアル・ハラスメントにあたるとはいえない。

しかし、非常に高いレベルで競技力向上をめざすために長い時間をともにし、密接な関係を形成する中で、競技者の指導者に対する依存は高まり、競技者にとって指導者とのパーソナルな境界線は後退しがちになる、という点には注意を払っておく必要がある。20 歳代の指導者が指導目的でよく行う「ひとりだけ呼び出す」「マッサージでさわる」といった行為が、相手のパーソナルな領域に踏み込む一歩となり、やがてより重大なセクシュアル・ハラスメントや性的虐待などにつながりやすい環境であることを、指導者はよく理解しておく必要があると思われる。

### <セクシュアル・ハラスメントになりうる行為に関する競技者の評価と受容と経験>主に国体レベル

ここでは主に女性競技者に焦点化してまとめる。

評価について適切であるとする回答が多かったのは、指導と関連づけられる行為 4 項目「月経について聞く」、「挨拶でさわる」、「マッサージでさわる」、「一人だけ呼び出す」に、「デュエット」、「お酌」、「性的な発言」を加えた 7 項目であり、これらはいずれも男女競技者間で有意差が認められ、すべて女性の方が「適切である」と答える割合が高かった（ただし男性競技者は、女性競技者が男性指導者からその行為を受けるのを、他者として適切と思う、という意味合いになる）。つまり、こうした行為を実際に受ける女性の方が許容的な態度をもっていることを示している。

また 16 項目中、「マッサージでさわる」「同じ部屋に泊まる」を除く 14 項目において、適切であると評価するより多くの女性競技者が、これらの行為を受容していることがわかった。受け入れられると回答した割合が、適切であると回答した割合よりも特に多かった項目は、「容姿に関する発言」、「二人きりの食事」、「ひわいな発言」、「デュエット」、「お酌」であった。

適切とする評価が多かった 7 項目に加えて、「容姿に関する発言」「二人きりの食事」「ひわいな発言」も受け入れられるとする人の割合が高く、これら 10 項目に男女競技者間で有意差が見られ、やはりいずれも女性の方が「受け入れられる」と答える割合が高い（ただし男性競技者は、女性競技者が男性指導者からその行為を受けるのを、他者として受容する、という意味合いになる）。

経験を受容との比較で見ると、8 項目において、経験した人の割合が受け入れられるとする割合よりも高かった。特に「容姿に関する発言」「ひわいな発言」が群を抜いて高く、適切である、または受け入れられると考えるよりはるかに多くの女性競技者が、これらの行為を実際に経験していることが明らかになった。

男女の競技者では、評価・受容・経験ともにその質に違いがあるので、単純比較はできないが、特に男女で有意差がみられた評価の 7 項目と受容の 10 項目すべてで、女性の方が男性よりも許容的であったのが特徴的である。

### <セクシュアル・ハラスメントになりうる行為に関する指導者と競技者の比較>全国レベル以上

指導者と競技者をそれぞれ性別にグループ化して比較したところ、評価では全般的に指導者より競技者の方が許容的な傾向を示した。特に女性競技者の評価の甘さが際立ち、16項目のうち8項目において、適切であるとする割合が最も高かった。「容姿に関する発言」と「ひわいな発言」は、男性競技者において適切と考える割合が最も高く、これら10項目すべてで有意差が認められている。

男性指導者と女性競技者の経験を比較すると、全項目において女性競技者の経験率が上回っていた。「1指導者対複数競技者」の指導状況などを想定すると、この数値を単純比較することはできないが、このことは逆に、一人の指導者が指導環境に与える影響の大きさを物語っており、セクシュアル・ハラスメントになりうる行為に関して指導者はより一層注意して慎まなければならないことを示している。

### <スポーツ指導におけるセクシュアル・ハラスメント>自由記述から

セクシュアル・ハラスメントに関する自由記述からは、基本的にはそれがいけないことであるという認識を共有しつつも、通常はスポーツ指導として許容されている行為がセクシュアル・ハラスメントに該当するかどうかの判断にとまどっている指導者の姿が浮かび上がった。

自分が受けた、もしくは見聞したセクシュアル・ハラスメント経験として典型的な事例は、マッサージと称してからだに触るパターンであったが、指導者がみずからマッサージを行った経験についての記述では、指導上の必要性を訴えるものが多かった。伝聞としては、指導者と競技者（その母親との関係もあった）との恋愛関係・性的関係の記述もマッサージと同様であったが、あまり具体的なものではない。

暴力に関する意見が肯定と否定とで拮抗していたのに比べ、セクシュアル・ハラスメントに関しては、肯定的な意見は否定的な意見の半分以下であった。そしてそれは、暴力の場合のように勝利やしつけのための積極的肯定とは異なり、むしろ敏感になりすぎることや騒ぎすぎることへの懸念と指導上の困難に基づくものとして読み取れた。やや問題を感じたのは、セクシュアル・ハラスメントがスポーツにたずさわる人々の人権にかかわる問題である、という認識よりは、時代の流れでやむなく気遣わざるをえないというニュアンスが感じられた点である。しかし配慮を要することがらであるという認識は共有されており、「必要と感じたときには「ちょっと触りますよ」と声をかける」とか「1対1の密室指導をおこなわない」などの対処法もいくつか記述されていた。

セクシュアル・ハラスメントを否定する意見としては、他領域に比べてスポーツ界の対処の遅れを指摘するものや、従来よりも陰湿化する傾向があるのではと懸念する声も聞かれた。その中で、スポーツ界のセクシュアル・ハラスメントを個人的な倫理問題としてのみ捉える傾向が見られたのは、少し注意を要する点であると思われる。

スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメント（暴力も含め）について特に指摘しておかなければならない点は、学校体育中心のスポーツにおいては特に、競技者は指導者を選べない構造にあり、それが暴力やセクシュアル・ハラスメントを生み出す土壌になりやすいという点である。そして指導者が絶対的な権力をもつとき、その可能性はさらに高まるであろうと考えられる。そういう意味では、

これを単に指導者の個人的資質の問題でとらえるのではなく、むしろスポーツがセクシュアル・ハラスメント等を生じやすい土壌をもつという構造的な問題としてとらえる必要性があることを強調しておかなくてはならない。

それゆえ、「指導空間として風通しのよい開かれた場を常に心がけること」という指導者の意見は特筆に価する。独善的な指導者がつくる閉鎖的な空間にこそ、暴力やセクシュアル・ハラスメントが生じる危険性があるという認識を共有できれば、自省・自戒・自制を伴う「風通しのよい開かれた場」を作ることが可能になるのであり、それこそがセクシュアル・ハラスメントを起こさせないための重要なポイントであるということが出来る。そのためには、いくつかの自由記述の指摘にみられたように、日本のスポーツ指導者が置かれているボランティア体質を改善していくこともひとつの方策になるだろう。

### <インタビュー調査から見てきたこと>

インタビューに応じていただいた3名の指導者は、いずれもスポーツ指導における暴力やセクシュアル・ハラスメントに関して高い意識をもち、こうした行為に対して厳しく一線を画しておられたのが印象的だった。中には、組織におけるご自身の指導的立場を活用して、指導者の暴力的行為を防止するための積極的な活動をしている方もおられた。

セクシュアル・ハラスメントになりうる行為に関しても敏感な姿勢をもち、身体接触には細心の注意を払い、個室指導も女性選手に対しては行わない、選手との恋愛関係も、指導者と競技者という立場においては線引きをするべきとの立場を明確に示されたのが印象的であった。そこには、「強くなりたい選手は指導者の言うことを聞いてしまうものだから」という、権力サイドにいる自らの位置に自覚的な態度が見られた。

風通しのよい指導現場をつくるためには、指導者同士の日常的な交流の機会をつくり、指導方法の工夫などを常に情報交換できるようにしておくことも有効な方法であるように感じられた。

指導関係においては常に権力関係が生じてしまうのであり、指導者はそうした権力を自覚しておかないと、指導を受ける立場の人に我慢させてしまう構造に陥りかねない。暴力やセクシュアル・ハラスメントをめぐる悪循環を断つためには、人間関係のごく基本的な「人権」という意識をスポーツ指導の中に定着させていくしかなく、それはまずは、指導者側が率先して配慮すべきことがらなのである。

しかし一方で、暴力やセクシュアル・ハラスメントを防止するための取り組みが、いたずらに指導者に疎外感をもたせるものであってはならない。IOCのセクシュアル・ハラスメント声明文作成会議で指摘されたように、暴力やセクシュアル・ハラスメント防止の取り組みは、コーチングを制限するものとしてみなされるべきではなく、むしろより効果的なコーチングのための中心テーマとしてすえられるべきものである<sup>注)</sup>、という考えをスポーツ界で共有したいものである。そのためには、日本の指導者が置かれているボランティア的な体質の改善や、それに基づく風通しのよい指導環境の整備、

そして被指導者とのパーソナルな境界線を侵すことなく成果を高める具体的な指導方法の構築、などが今後のスポーツ界にとって重要な課題となるだろう。

はじめに記述したように、今回の調査では、調査の制約上、指導者についてはあらゆるレベルを対象とし、競技者については主に国体レベルの選手を対象としたため、指導者と競技者のデータはそれぞれ個別に読み取られることになり、データの相互比較については全国レベル以上という一部の比較にとどまった。今後は、種目との関連の分析なども含め、競技者についても異なるレベル（もしくは志向）を対象に調査し、レベルごとの指導者と選手の比較などを通して分析を進める必要がある。また、個人的な聞き取り調査などを通して、スポーツ指導における指導者と競技者の相互作用についてより解明を進めていくことが今後の課題となろう。

注) 第2章第4節まとめと考察を参照。